川崎市立 日本民家園

日本民家園だより　45号　　平成12年10月1日　　編集・発行　川崎市立日本民家園

年中行事展示

民家園では、毎月（４月を除く）古民家や古民家周辺で年中行事展示を行っています。８月は盆行事として盆棚（写真1）と砂盛を展示しました。９月は十五夜での行事を旧北村家で展示しています。先人達が伝えてきた風習・伝統を知ることのできる良い機会だと思いますので、是非ご覧になって昔の生活に思いをはせて下さい。また会場には毎月の行事ごとに解説シートがありますので、ご自由にお取り下さい。

なお10月は収穫祝いの行事である「刈り上げ」を旧北村家にて展示します。今後の年中行事予定は下記の通りです。

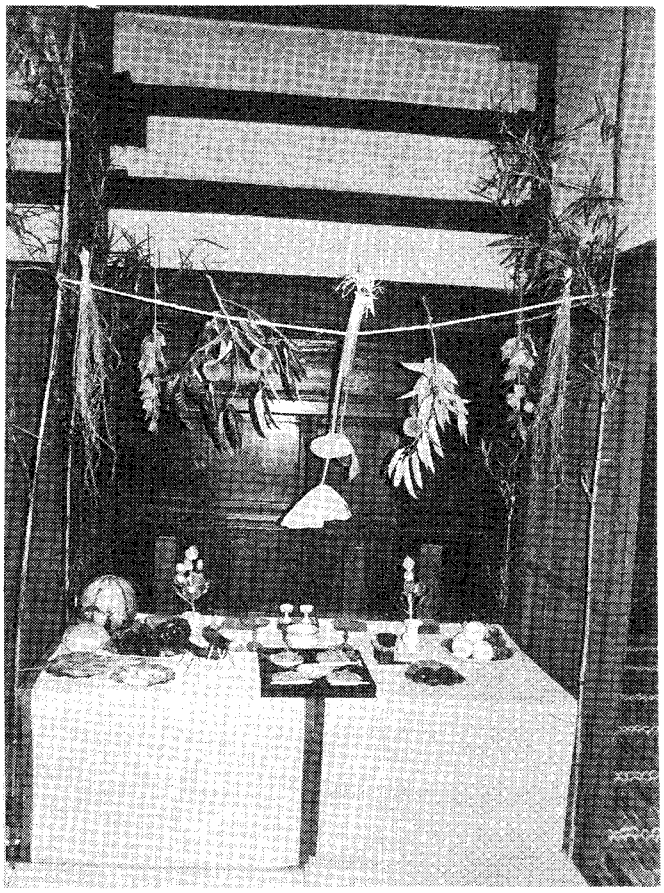

写真１　年中行事展示・盆棚（旧北村家）

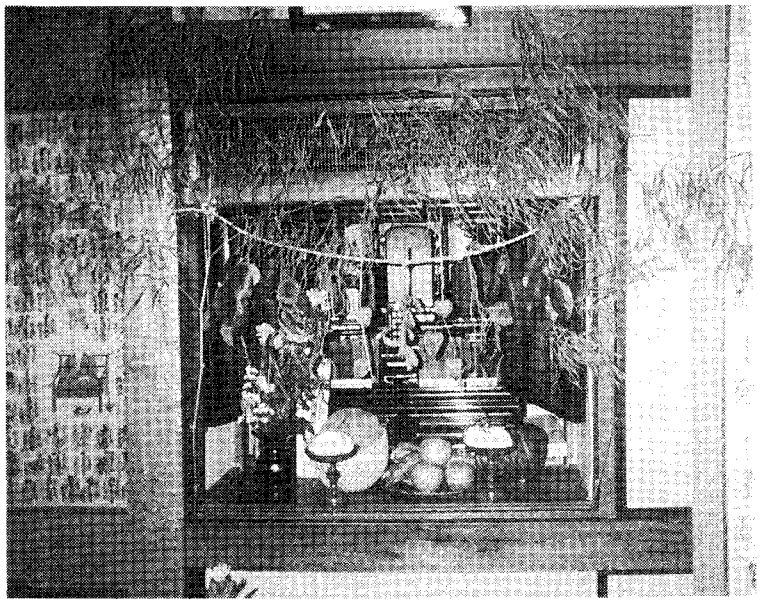

写真２　盆棚（平成12年８月川崎市高津区新作青木弘宅）

【年中行事展示】

10月	刈り上げ
11月	扱き上げ、雪囲い（～3月）
12月	正月準備、八日僧
1月	正月飾り、小正月飾り
2月	節分、八日僧
3月	節供雛
3月下旬	蚕影山のまつり

日本民家園には、年間約9万人（平成11年度）の入園者があります。個人・団体として、幼稚園生や小学生から高齢者の方々まで幅広い年齢層のみなさまにご来園いただいております。今回はそうした多くの来園者の中から、若者の目から見た「民家園に対する感想」を紹介したいと思います。

日本民家園を訪れての感想

川崎市立看護短期大学一年
深野木（ふかのぎ）　千春（ちはる）

日本民家園に行くのは２回目だった。とは言っても、正直に言って、初めて日本民家園を訪れた時のことは全く覚えていない。母は私が幼いころに連れて行った事があると言い、２回目だということを知った。そのときの母の記憶は鮮明で、行くと心が落ち着いたよと言っていた。実際、今回日本民家園を訪れて、母がそう言ったことに素直に共感できた。

民家をまわると、１つ１つの家にそれぞれ違うあたたかみを感じる。特に、家に一歩を踏み入れたときの匂いはどの家も異なっていて、「あーいい匂い」と言いたくなるようなものから、「何の匂い？」と少し不快に感じるものまであったが、どれも味わいがある。そして夏にしては涼しく感じ、だからといって一年中室内温度が低いのかといえばそうではないようで、どうやら冬は冬で暖かそうだと感じさせられるようなあたたかさである。これは、家の構造的なものなのか、それとも家の材質的なものなのかと、少し不思議に思った。

船越の舞台は民家園で一番高いところに位置していて、そこへたどり着くまでに運動不足の私はヘトヘトになってしまった。ところが、人がいなかったせいか、静まり返ったその場所は、民家園の中でもひときわ違う場所に感じ、疲れも一気に吹き飛んだ。舞台を回りその下に入ると、かなり広い空間があり、当時はそこに人が入って人力で舞台を回したという。

また、民家に置かれている家具はほこり一つなくきれいに手入れされている。日本民家園に足を運ぶ一人ひとりが満足して帰るうらには、園の隅々までより良い状態で後世に受け継いでいこうと日々思い続ける職員の皆さんや、地域ボランティアの方々の働きや支援があるということを思い知らされた。

日本民家園を訪れて、どこかちがう時代、ちがう場所へとタイムスリップでもしたような気分になった。そう感じる時というのは、たいてい時間が早く過ぎてしまうもので、今回もあっという間に一日が終わってしまった。午前１１時に太田家の前で待ち合わせをし、それから夕方までずっと歩きっぱなしで、いつもならみんなで「疲れたー」の大合唱のはずが、今回は向ヶ丘遊園駅の近くで卓球をする元気が残っていた。そうだ、多大な疲れも日本民家園が癒してくれたのである。そして疲れを遙かに上回る何かを得て帰ることができたということである。その何かとは言葉ではとても表現できないもので、不断の生活を送っていく上で自分の中で確かなものになっていくものではないかと思う。

博物館実習生の感想

今井初夏（東京造形大学４年）

民家園には以前一度だけ来たことがあった。生田緑地の中にあり、環境に恵まれた所だと感じた。私は民家に興味を持っていたので楽しめたが、他の来園者は民家園に何を求めに来るのだろうか。民家そのものを見に来る人、自然や民家の雰囲気を楽しむ人がいると思うが、「また来たい」と思ってくれる人がどれだけいるかが大切だと思う。民家園は様々な年中行事や公開講座があるが、企画展がめったにない。民家という性質上、民家そのものが常設であり、改造や展示品を置くこともできないので難しいと思うが、定期的に企画展があれば何回も人が来ると思う。実際には実現不可能だと思うが、私は民家にミレーの絵があったら面白いと思う。押戸に農村風景の絵が飾ってあったら、どんな風に見えるだろう。１軒に一枚ずつ絵を置いていったら、また違って見えると思う。

（中　略）

さらに、民家を利用して日本家屋の流れの説明もできる。部屋の配置、屋根の構造、書院造りの流れ、玄関の造りなど、興味深いところはたくさんある。それらを実際に民家を見学しながら学べるような企画展ができないであろうか。造り全体を見た人が、次には細部にも目がいくようにすると、民家の見方が変わってきて、実際の私達の生活と重ねて見ることができ、楽しめると思う。どのようなジャンルにしても「共感できること」は大切だと思う。何か自分の中のものと交差する感覚があれば、興味を持つことができる。私達の生活を知る場としての視点を来園者が見つけてくれたら、もっと興味深くなると思う。

小玉晶子（昭和女子大学３年）

（前　略）

実習内容では、普段経験できないことをやらせて頂いて勉強になった。徳に私は障子貼りと床上公開と土壁づくりが印象深い。障子貼りかえは昔はよくやっていたことだろうが、今の時代ではあまりやらない。私の家にも障子は１枚しかない。伝統的な作業にもかかわらず、今までやったことがなかったので、とてもいい経験となったし、将来障子のある部屋に住み自分の子どもに貼り方を教えたいと思う。床上公開では囲炉裏に火をともした。これもまた初めての経験であった。まきをきれいに燃やしていくという作業は意外と難しかった。また、来園者の方に声をかけたり、説明したりすることもあまりやったことのないことで、とても難しかった。やはり自分がそのことに対して勉強不足であると自信をもって説明できないので、学芸員はやはりより多くの知識が必要だと感じたと共に、外国語の重要性も身にしみて感じた。

（後　略）

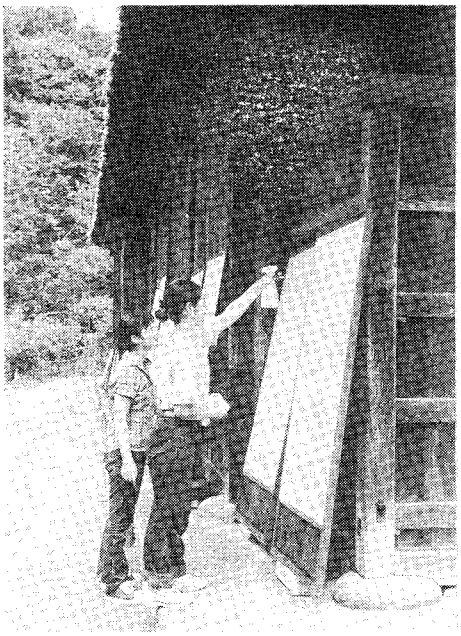

写真３　実習作業風景（障子張り替え）

※日本民家園では、毎年博物館実習生を受け入れています。今年度も27大学48名（予定）が来て、学芸員の資格を得るためさまざまな作業や体験、勉強をして行きました。

日本民家園収蔵資料紹介（2）　～米の選別農具『唐箕』～

赤トンボが空を舞い、金色の稲穂が風になびく。その横では稲刈りをする人達が……。日本の秋の原風景といってよい情景でしょう。稲作を中心とした作業・習慣は日本人の生活に深く根差してきました。しかし現在、長い歴史の中で培われてきたそれらの伝統が失われつつあります。そこで今回は数多くある民家園の民具資料から、人工的に風を起こして穀物を精選する農具である『唐箕』を紹介したいと思います。

日本民家園が所蔵する唐箕は全部で10点あります。そのうち9点を古民家内（図版参照）で展示しており、本園を訪れた方にご覧になっていただいております。唐箕は、12世紀頃中国で発明されたと考えられています。日本で初めて唐箕が登場するのは、貞享元年（1684）に書かれた『会津農書』の中です。江戸時代の文献には、「唐箕をもたない農家には奉公に行かせない」という地域があったことが載っています。それほど当時は唐箕が非常に便利で、また高価で珍重されていたことが窺えます。このことは唐箕に住所・氏名・年号等を記し、所有権を明確にしようとしたものが存在することからも推測されます。現在、江戸時代の年号が書かれた唐箕は60数点確認されています。ちなみに最古のものは明和四年（1767）銘の唐箕です。本園が所蔵する10点の唐箕のうち3点に年号が記されており、その内1つは文久三年（1863）が記されています。唐箕の使用方法としては、1：開口部に米を入れる、2：唐箕の内部にある歯車を回転させる、3：落下調整装置を用い開口部から少しずつ米を落とす、4：歯車によって起こった風の力で籾殻や塵などを飛ばし、米もその大きさ・重さによって精選される、というのが一般的なようです。

江戸時代に高価で貴重な存在だった唐箕ですが、明治期から大正期に全国的に普及し、各農家で使用されるようになりました。しかし、大正末期から昭和初期に動力脱穀機が使用され始め、さらに昭和20年代以降における農業の機械化により、手動の唐箕は農家から姿を消していきました。現在では使われなくなった唐箕ですが、まだ倉庫などにたくさん眠っていると思われます。皆さんの身の周りに残っている唐箕を探してみてはいかがでしょうか。　（学芸員　栗田　一生）

図版　唐箕が見られる民家（白抜の家）

文久三年銘の唐箕
（旧太田家）

〒214-0032　川崎市多摩区枡形7-1-1　電話044（922）2181　　川崎市立日本民家園
http://www.city.kawasaki.jp/88/88minka/home/minka.htm